とある騎空団の日常

ＸＥＩ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あるグランブルーなファンタジーの主人公たちの一幕。

小鳥のＳＮＳのとあるタグに影響受けてます。

目　次

風邪と布団と侵略者（セン、アンチラ）――――――――1
姉妹のような同僚（ゼタ、ベアトリクス）――――――――10
トリプル美少女錬金術師（カリオストロ、クラリス）――――――――22

風邪と布団と侵略者（セン、アンチラ）

「キミもああいったえっちな本、読むんだね。僕びっくりしちゃった」
「!?」
　朝から爆弾発言を投げつけてきたのはアンチラだった。グランサイファー、その食堂での一言。グランは水を思い切り気管支に入れてしまい、盛大にむせてしまう。
　声量は大きくなかったが、少なくとも数人の団員はお喋りを一瞬で止めてこちらに視線をやっている。呆気にとられた表情だったり、同情的な視線だったりをモロに感じる。
　さらには腹を抱えて笑っている性悪な先祖の方の美少女錬金術士もいて、グランは最悪だ、と顔が青ざめた。カリオストロに秘密を知られるというのは致命的なまでのディスアドである。
　というか。「……あ、アンチラ、どうしてそのことを知ってるんだ？」問いかけるグラン。「ん？　だって僕、よくキミの部屋でお昼寝してるし」当たり前のようにアンチラ。
「……初耳なんだけど」
「初めて言ったからね」
　え、ほんとに気付いてなかったの？　と逆に意外そうな目で見られる。やけに布団から女の子のような匂いがすることがあると思ったら、洗剤とかではなくアンチラのものだったらしい。グランは鈍い自分に天を仰いだ。
「ま、まぁコイツも男なんだ、そういった本の一冊や二冊は仕方ねぇだろ」
　微妙なフォローを入れたのはラカム。とりあえず話を終わらせる方向で進める気らしい。グランは仲間の心遣いに涙が出そうになる。が、
「おいラカム。ってことはお前もそういった本を何冊か持ってるってことだよなぁ？」カリオストロ、少し興味あるんだけど☆。眩いばかりの笑顔である。
「すまんグラン、俺は今からノーコメントに徹させてもらう」

「ラカム!?」
　頼れる仲間は一瞬でフェードアウトしていった。答えを言っているようなものだが。女性団員のやや冷たい目がラカムに降り注ぐと、そそくさと食堂を後にしていった。
「でー？　グランー、お前どんな本持ってるんだって？」
「ドラフ本でしょ、昔からそうだったし」
　意地悪顔をするカリオストロに淡々と答えたのはジータ。何事もなかったかのようにグランの隣に座りながら、「というかグランもそんなヘマするのが悪いと思うんだ」
「一応隠してたんだけどさ」
「子どもに見つかるような場所にあったって事でしょ？　まぁどーせ、机の裏側に袋つけ「待ってジータ！　それ以上は良くない！」」
「なんやベッドの下ちゃうんかい」
「あらあら」
「うわあああああ！」
　広まっていく！　グランの、人に知られてはいけない類の秘密が、どんどんと！　そして、食堂はちょっとしたカオスに陥った。
　ナルメアは「えっえっえっ、ど、どうしよう団長ちゃんが私に迫ってきたらっでもでも、団長ちゃんは団長ちゃんだしその」と謎の挙動不審ぶりを見せている。
　ダヌアは何もわかっていない不思議そうな顔をしてグランを見ている。そしてスッとダヌアを自身の後ろに隠すリーシャ。その目は雄弁に、「お前は秩序の敵だ」と語っていた。グランは泣きたくなった。
「ハァ？　ドラフだと？　正気かグラン。オレ様みたいな超美少女が側にいるってのに、脂肪の塊にうつつを抜かすなんて有り得ねえっての」
　一転不機嫌なカリオストロは、「一度スペアボディ複数でロリの良さってやつを教え込まねえと……いやその前に」何やら不穏な空気。もはやどうしたものか、グランには判断がつかない。
「まぁ、とりあえず」とジータ。

「その本は、私が処分しとくから」
「え」
　思わず声を上げるグランに、「アンチラちゃんの教育に悪いし。他にも小さい子はいっぱいいるんだよ？」やや怒り気味で言葉を返した。
　そう言われてしまえば、グランはやはり何も言うことができない。何せ全てはアンチラの侵入に気づかずにお宝を物色された自分が悪いのだから。
「という事で、この件は私が預かるから各自、食べ終わった人から持ち場に戻ってねー。３０分後には出発するよー！」
「はーい！」
「おう」
「承知した」
「はいはい了解」
　そして。結果、グランが後生大事に集めてきた十数冊のそういった本は、ジータによって焚書された。
　捨てられたものを回収しようと画策していたグランはまた泣いた。普段頼もしい団長のみっともない姿に心配する団員も多かったが、リーシャやジータの態度からある程度察したらしく、ソリッズやヴェインたち以外に彼を慰める者はいなかった。
　この出来事は、グランエロ本事変として女性陣の間で色々と広まっていくことになる。

　数日後。
　いつも通り依頼を終えてグランサイファーに帰船したグランが自室に戻ると、布団がこんもりと膨れ上がっていた。ちょうど人1人分ぐらいの大きさである。
「アンチラか？」
　グランが思い当たるのは、寝坊助のお役目様。西南西の守護神たる、エルーンの少女である。こっそりやっていた（と思われる）昼寝

が発覚してからは、依頼がない日は毎日のように、度々グランの部屋で寝入るようになっているのだ。
部屋は割り振っているのだから、わざわざ布団に潜り込んでくる必要はないだろうに。そう思うグランだが、アンチラはニコニコと微笑むだけで聞き入れることはない。何度でも侵入し、何度でも昼寝を貪る。
少女が男の部屋に入り浸りというのは風聞にも影響があるし（これ以上評判を落としたくないグランである）、ジータの目が据わって来ているところだ。そろそろ本気で説得を行わなければいけないかもしれない。
幸せそうに寝るアンチラは、甚大な被害を受けた今ですら見ているだけで暖かな気持ちになる。叩き起こすのはあまり気が進まないが、心を鬼にしようと、グランは布団を引っぺがす。
「へくちっ……団長さん、寒いですよ……」
しかしグランの予想とは裏腹に、中で丸まっていたのはセンだった。予想外の出来事で一瞬固まるグラン。状況があまり飲み込めていない。え、なんでセンがここに？　いつから俺の部屋は集会所になったんだろう、とかそんな感じ。
「風邪、引いちゃいまして……けほ。心細く、なっちゃって」
たまに咳き込みながら、恥ずかしそうにするセンの顔は、確かに普段よりも赤らんでいる。とりあえずセンが風邪だとわかったグランは、慌てて布団をかけ直した。センは、ほにゃっとした笑みを浮かべて、
「ふぁ……あったかい、です」
「……それで、どうしたんだ？　セン」
少しぼうっとした顔で、
「病気の時って、けほ。人に甘えたくなりませんか？　けほり」
「それは……そうかもしれない」
なるほど、と頷いた。グランも経験がある。体調が悪い時は何を考えてもネガティブな方向に行きやすいし、1人だと自分が世界に取り残されたかのような寂しさを感じるのだ。ジータもそういった面が

顕著で、ザンクティンゼルではよくつきっきりの看病を迫られたものである。
「でも、なんで俺の部屋に？　ジータやカタリナじゃダメだったのか？」
「一番最初に、けほ。浮かんだのが、団長さんの顔だった、けほ。ので、けほ」
ダメだったでしょうか、と縮こまる。そんなことは無い、とグランは首を横に振った。いやまぁ、グランのここ最近のイメージとか色々問題はあるのだが、センは初犯。理由は共感も納得もできるものだったし、風邪で頭が回らないのだろうことを考えれば、仕方がないことだと思えた。
センの額に手を当てる。酷い熱ではないが、微熱よりは体温が明らかに高い。なるほど、風邪である。
「いつから寝てるんだ？」
「昼頃から……です」
「水分はとった？」
「お水、ですか？　けほ。水差しが空になってからは……」
もう夕方も暮れである。水は早急に取らせる必要があるようだ。
グランはついでに果物でも剥いてこようと席を立ちながら、「セン、大人しく待っててくれ」
部屋を出ようとしたグランだったが、服が控えめに摘まれていることに気づく。
「どうかした？」
「あの……水も嬉しいんですけど、けほ。その……一緒に、いて欲しいです」
可愛らしく懇願されると、グランも困り顔で頬を掻いた。
「じゃ、３０秒」
「え？」
「３０秒で帰ってくるから、その間だけは我慢してくれ」
言うが早いか、水さしを掴んで部屋を飛び出すグラン。そのまま調理場へ向かい、すぐに水を汲み取る。出来ればローアインに病人食を

作って欲しい旨を伝えたかったのだが、姿が見えないので仕方がない。ビィが部屋に戻ってきたら言伝でも頼もうと考えるグラン。
宣言通り、とは行かなかったが、出来るだけの早さで部屋へ戻ったグランを、センはぱちくりとした目で見つめた。
そのままプッと吹き出すと、
「やっぱり、変な人です。団長さん」
「そうかな？」
「はい。でも……暖かくて、優しい人」
「？」
誰でも、仲間が病気に臥せたらこれぐらいはするだろう。そうグランが言うと、またセンは笑った。
「体、起こせるか？」手を差し出すグラン。
「ありがとうございます。大丈夫ですよ」
水を受け取ってコクコクと水を飲み干すセンは、言葉通り無理をしている様子ではない。グランはひとまず安心した。真面目なタイプは無理をしがちなのである。
センはコップを置くと、「あの……」少し申し訳なさそうな顔しながら、お願いがあるんですけど、と続ける。
「手を、握っててもらえないでしょうか」
出来れば、私が寝入るまで。と、セン。断る理由もない、グランはすぐに頷いた。
「お安いご用だ」
病気の際の人肌は、これ以上なく安心感を与える。それを知っているグランは、優しくセンの左手を握る。華奢なものだ。普段はグレートタロンに隠されていて知らなかったが、センの手はグランのそれよりも小さくて柔らかい、壊れ物のようなものだった。
「団長さん、ありがとうございます……にゃ」
お礼を言ってから、目を瞑る。そして、センの呼吸がだんだんと規則的に、深くなっていくのを見ていると、グランもまた依頼疲れからか、抗い難い睡魔に襲われ……2人とも、夢の中へと旅立っていった。

早朝。センが目を覚ますと、昨日感じていた体の怠さや寂寥感が嘘のように引いていた。元気も元気ないつも通りの体調である。思わず飛び跳ねたくなるのを室内だからと堪えて、

「やたっ」

早速外へ出ようと起き上がるセン。その時になってようやく、自身の左手の状況に気づいた。

「あっ……」

「……」

強く握るわけではなく。しかししっかりと離さないように握っている、座ったまま寝ているグラン。言うまでもなく、一晩中こうしてくれていたのだろう。

端的に言えば、ただのワガママだったのだ。寂しいからと人の部屋に入り込み、寝床を勝手に使い、極めつけに側にいて欲しいと言う。これを身勝手と言わずになんというのだ。

しかし、グランはそれに嫌な顔1つせず、心配して色々と看病してくれて。それがたまらなく嬉しかった。

センは繋いでいる手から伝わる体温以上に、心が暖かくなるのを感じた。

――もう一眠り、しようかな。

グランを起こさないように、かつ左手は使わずに。自分と同じく布団に入らせる。そして、手を繋いだまま、センは再び目を閉じる。数十分後、グランが驚いて大声を上げるまで、幸せな眠りについたセンだった。

さらに翌日。

「けほけほけほ。風邪引いちゃったー。キミなら看病してくれるよね？」

今度こそ、布団を我が物顔で占領していたのはアンチラだった。わざとらしい咳をしながら、心なしかドヤ顔である。センとの一件を目

敏く察知していたのだろう。今日は風邪とのこと。もちろん嘘なのは間違いない。
「実は俺も風邪なんだ」
「ふーん。じゃあ2人とも風邪だね、隔離病室だね。仲良く2人で一緒に寝ようよ」
「本当にそうなったら、不生不滅で治してくれ」
「そんな万能な力じゃないんだけど」
　軽口を叩きあいながら、「部屋に帰すからな」「えー」どこからどう見ても健康体なアンチラを小脇に抱えて彼女の部屋へと連れ戻す。
「キミ、僕への扱い雑じゃない？」
「本当に風邪になったら、看病もするさ」
「本当？　ならいいや」
　最初は不満がありありと浮かんでいたが、グランの返答を聞いて。特に暴れることもなく素直に抱えられるアンチラは、上機嫌に尻尾を振った。
「あ、でも」とはアンチラ。
「？」
「グランの布団は、僕のものだからね」
「俺の布団は俺のものだろ？」
「じゃあ僕とグランのもの！」
　何がじゃあなのか、さっぱり理解できないグランだった。

「だからさー、――キミと僕の場所に、他の子とかは入れないでよね」
　言葉のトーンが低くなる。いつもの眠たげな表情と違って、真剣味がある表情。アンチラのちょっとした独占欲が垣間見えるこの場面。ただしグラン。朴念仁が服を着て歩いているような男。当然気づかなかった。
「俺以外に使わせる予定は今のところないよ」
「えー僕はー？」
「アンチラも」

「ぶーぶー、横暴だー」
「どこが」
アンチラは頬を膨らませながら、「僕は相棒だぞー」
「ビィとも寝床は別だよ」
「うっ。それを言われると僕も困る」
仲のいい兄妹のようなやり取りをしながら、グランは考える。
――鍵、かけるかなぁ。
妥当すぎる解決法だった。エロ本事変のような悲劇を防ぎ、アンチラを撃退し、穏便にセンのような例を他の部屋に誘導できる手段である。
隣の部屋がジータの部屋なので、恐らく鍵がかかっていたらセンはジータの部屋へ向かっただろうとグランは考えている。事実それは正しかった。センがグランに安心感を覚えるまでは、の話だが。これから同じことが起きたとして、センが向かうのはグランの部屋に他ならない。それを、グランは分かっていなかった。
とりあえず。あんな事件(もちろんエロ本の方だ)があってから、いきなり鍵をかけ始めるのもどうかとは思ったグランだが。ジータに相談したところ、「ようやくそこまでたどり着いた?」と嘆息しながら「はい、鍵」と、用意されていた鍵をもらい。ラカムたちに協力してもらい、設置することができた。
こうして、多大な犠牲を払いながらも、一旦は2人の侵略者との戦いを終えたグラン。しかし、まだまだその戦いは終わりそうにない。
風邪を引いたことにより、冬の甲板での昼寝を禁止されたセンは、グランの部屋に潜り込むようになる。アンチラも鍵程度で諦めることはなかった。頭を抱えるグラン。一体どこから忍び込むのか、窓か？　窓なのか？　窓も鍵占めてるんだけどなぁ!?
とにかく状況は何1つ改善されず、センは物理的に、アンチラは仙術で、それぞれグランの部屋に忍び込む。
そこでブッキングしたアンチラとセンがさらなる問題を起こすようになるのだが、それはまた、別の話。

姉妹のような同僚（ゼタ、ベアトリクス）

「ねえねえ団長さん。今夜、カリオストロに付き合ってほしいな☆」
朝食を食べにグランが食堂へ赴こうとする時。そう声をかけたのは全空一の美少女を自称する錬金術士の始祖だ。
自他共に（外見だけは）認める愛らしい満面の笑顔だが、そんなものには騙されない。それなりの付き合いになるグランはカリオストロの発言の意図を正確に理解して胡乱な顔になる。
――新薬ができた。お前で人体実験させろ。
要約するとこんなところだろう。なんかこう、色々と台無しだった。
「で、出来れば遠慮したい、かな？」
やや顔をひきつらせながら、正直な感想を述べたグラン。いつもの事である。普段はここで少し機嫌が悪くなるカリオストロを何とか説得して、機嫌取りに一緒に依頼に出かけたりするのが通例だったのだが。
今日に限っては、カリオストロは拒絶の言葉を投げかけてもニコニコと笑顔を崩さない。
……何か知らないが、これはまずい。直感的に悟ったグランは踵を返そうとして「【ドラフ爆乳百選！ファータグランデいいとこ取り】」
「待って」
「【パーイオーツ連峰。聳え立つドラフ山】」
「ちょっと」
「【ドラフ系巨乳幼馴染み。あの子のジョブは俺の嫁】」
「俺が悪かった!! だからやめてください！」
自身でも驚くほどのスピードで、慌ててカリオストロを通路の奥に隔離する。
今挙げられたタイトルは、全てがグランが所持していた、ジータに処分されたブツの名前である。時間（朝だ）、心の傷（全てお気に入りのものだった、もう返っては来ない）、そしてそのタイトルを読み上げるカリオストロの容姿と声（犯罪そのもの）。色々な意味でアウト

だった。
「どこで知ったんだよ……」
「この船のことで、オレ様が知らないことの方が珍しいぜ？」
「俺は出会った時以上に今のカリオストロの方が怖い！」
　ペンは剣より強し。一騎当千の力を誇る戦場のカリオストロよりも、グランが必死に隠していた情報を容易く入手してしまうカリオストロの方がグランにはキツかった。というか個人情報どうなってんのこれ。ねえ、折角つけた鍵の意味は？
「鍵？　ああ、そんなもん錬金術でこう、ちょちょいと」
「錬金術便利だなぁ！　主に悪用に！」
「オレ様だってやっていい事と悪い事の区別ぐらいしてるさ。お前の部屋にしか侵入してねえよ」
「そういう問題じゃない！」
　もはやヤケクソである。
「待ってくれ、待とう、いったん落ち着くんだそうしよう」
　ハッとしたグランは、急激に脳を回転させる。万一誰かにこの会話を聞かれれば二次災害が起こる。そうなれば、ただでさえ口を滑らせるカリオストロが握っている特ダネは、瞬く間にグランサイファー中に知れ渡るだろう。
　まずはこれ以上なくノリノリなカリオストロ。その口をとりあえず手で物理的に塞いでから空き部屋に連れ込んで……などと物騒なことを思い始める。完全に人攫いのそれである。
「カリオストロに～、な・に！　するつもりなのかな～？　ブフッ、やぁん。団長さんこわーい☆」
「笑い事じゃないんだよ」
「これが笑い事じゃなくて、何が笑い事なんだよ。よくもまぁこんだけドラフ本ばっかり集めたもんだなお前。ドラフマニアか？　乳圧のフルチェインが大好きなのか？」
「俺の尊厳とか諸々はどこへ!?」
　乳圧のフルチェイン。ドラフのエロ本を二桁以上集めた者に贈られる称号。報酬、１０宝晶石。謎の電波を受信したグランだった。乳

圧のフルチェイン。これもまた、グランが持っていた至高の一品の名前である。
首を横に振って、電波を振り切る。堪えきれない、とプルプル震えるカリオストロを見つめるグランの目は、今や実戦さながらの真剣そのものだった。しかし、その杞憂も当然のこと。
グランサイファーには気心知れた男連中も多いが、女性団員もかなりの数に上る。そんな中で女性に軽蔑されるような事を積み重ねるわけにはいかない。毎度お咎めなしで済むとは限らないのだ。
特についこの前そういった印象がついてしまったグラン、必要以上に過敏にもなる。誰だって好き好んで社会的に死にたくはない。
（タイトルが知れ渡るのはヤバい、本当にヤバい）
具体的にはナルメア辺りが大暴走して、「団長ちゃん団長ちゃん、お姉さん、幼馴染みになってあげようか？」とか、「連峰……お姉さんだけじゃ足りないね、アリーザちゃんやアニラちゃんにも声かけてくるね！」とか。
それでジータやリーシャ辺りから、とばっちりを食らうイメージがありありと浮かぶ。そうならなかったとして、爆笑して済ませてくれるのはユエルやメーテラぐらいのものだろう。
例えばヘルエスやファラ、ジャンヌのような真面目な女性には引かれること間違いなしだし、クムユには泣かれるかもしれない。アンスリアに知られるのはなぜか非常に怖い。ヴィーラなんて言わずもがな。ゴミ虫のように蔑まれること請け合いだ。ミムルメモル速報待った無しの事案である。グランは背筋が凍った。
１つ勘違いとして、カリオストロとてグランとこの騎空団を気に入っている。いくら刹那的な面白さを求めるカリオストロでも、特に理由もなくグランを貶めるような真似はしない。
の、だが。それを理解していないグランの焦り具合がまたツボに入った。だからお前は飽きねえんだよ、とはカリオストロの談である。
「ククッ、大勢の団員の前じゃないだけマシだと思え」
一頻り笑いに笑ったカリオストロは、

「んじゃ、今日の夜9時、オレ様の部屋に来い」
「……拒否権は」
「あると思うか？」
　あるわけがない。一番秘密を知られてはいけない人間に、弩級の秘密を握られてしまったのが運の尽きである。ガックリと項垂れた。
「それじゃあ団長さん。夜、楽しみに待ってるね☆」
　天使のような悪魔の笑みを浮かべて。元凶は廊下を後にする。朝からどっと疲れたグランもまた、それに倣った。カリオストロは夜の実験へと思いを馳せ、グランは魂の抜けたような顔をしてトボトボと朝食をとりに行く。
　二人とも、別のことに気を取られていたり、そもそも気を張る余裕がなかった。だからグランにとっては不幸なことに、青い鎧の第三者がこの会話を盗み聞きていたことを、気づくことはなかったのである。

「ゼタ、ゼタぁー！」
「……？」
　グランの心情とは裏腹の澄み渡った蒼空を、のんびりと駆けるグランサイファーの一室。アルベスの槍を自室で整備していたゼタの元へと涙ながらに飛び込んで来たのは、ゼタと同じ組織の構成員、ベアトリクス。
　ノックもなく部屋へ突入して来たかと思えば、呆気にとられるゼタを視界に捉えると一直線に駆け寄って、「ちょ、ベア！　待っ」「ゼタぁぁーっ！」「ウッ」勢いよく飛び込む。
　咄嗟に槍をベッドへ投げ、乙女が出してはいけない声を出しながらもどうにか体全体で受け止めたゼタ。
　怪我をしそうだったとか、武器の手入れ中に飛び込んでくるなとか、そもそもノックはどうしたとか。色々と常識はずれなベアトリクスへの怒りが湧いてくるものの、「はぁ……」いつも通りのことと諦める。

胸でぐずるベアトリクスを抱きしめてあやす。相談事があるのは明白だが、普段の物怖じしない態度とは裏腹に、変な所では焦れったいのがベアトリクスだ。落ち着かせるのが先決だろう。と、ゼタはそんな妹分を撫でて落ち着かせながら、椅子へと座らせて、
「紅茶でいい？」
「あ、あぁ」
「砂糖は２つ？」
「……３つがいい」
「お子ちゃまね」
「な、なにおう！」
　据え置きの紅茶を淹れて、ベアトリクスへと差し出した。出されたカップを引ったくるように持つと、豪快に一気飲みするベアトリクス。ゼタは嘆息した。
「アンタねぇ……ビールじゃないのよ？　お上品に飲めなんて言わないから、もっと味わって飲みなさいってば」
「どうせ私には味なんてわからん！」
「威張るな」
　軽くゲンコツを落とす。「痛い！」何するんだ、と抗議するベアトリクス。色々と子供っぽいというか子供そのものだ。元貴族なのだから、やろうと思えば品ぐらいいくらでも出せるだろうに。と思わないでもないゼタではあるが、このままではいつまでも話が進まない。
　ゼタはすぐに冷静さを取り戻して椅子に深く腰掛け直した。ベアトリクスもそれを見て、やや不服そうだが佇まいを直す。
「そんで、どうしたのよ」
「その……団長の、ことなんだが……」
「グラン？　グランが何かやったの？」
　グランはゼタから見ても年下とは思えないほど多方面に秀でていて、特に人付き合いの上手さと自身の背中を預けることが出来るほどの強さが印象的な、頼れる団長である。
　最近アンチラが不自然なほどの頻度で部屋に入り浸っているとか、センと添い寝をしていたとか。不穏というか、あまりよろしくない噂

が立っているが。概ねゼタはグランを好意的に見ていた。そりゃ年頃の男子だし、可愛い子には弱くて溜まるものもあるでしょう、と。
　そんなグランが相談の対象で、ベアトリクスは言いにくそうに頬を染めながらもじもじとしている。ゼタは、「ははぁん？」と、ニヤニヤ。ずばりベアトリクスの悩みは恋愛事なのだろう、と予想した。
（ベアにも春が来たってこと？　いいんじゃない）
　元々優れた容姿を持っていて、黙っていれば生まれ持っての気品もある。お菓子作りにかけてはこの船でもトップを争う腕前だ。贔屓目に見なくとも、おっちょこちょいでさえなければ優良物件なのは間違いない。
　キューピッドなんて柄じゃないんだけどねえ、などと考えている中。頼れる同僚からこんな評価を受けているとは知らないベアトリクスは、散々「うー……うー！」と唸るだけ唸ってから、
「グランが、グランがな」
「うんうん」
「グランが……ど、ドラフマニアだったんだ！」
「うん……は？」
　ゼタの期待は一瞬で裏切られる。この子は何を言ってるのだろう、と一瞬理解ができなかった。
　会話相手の混乱をさておき、ベアトリクスは言葉を連ねる。
「カリオストロとグランが、廊下で話してたんだけどさ」
　胸に大きく息を吸って、
「その、グランが持ってたって噂のエロ本、全部ドラフのものだったらしくて。カリオストロが、ドラフマニアでにゅうあつ？　のフルチェインだとか言ってたな……」
　何とも言えない表情で事の顛末を語る。
　ようやく話に追いついてきたゼタは思案する。つまりそれはアレだろうか。グランがドラフのエロ本しか持ってなくて、それをカリオストロに散々弄られたと。この子はそれを聞いて、なんでか知らないが非常に焦っていると。
（え、何それ。超面白い）

そこまで考えが至った時点で、「ぷっ……くくくっ……くすす……！」笑いが堪えられなかった。
そして、ベアトリクスも同僚の異変にすぐさま気づく。
「な、なんだよぅ！　人が本気で相談してるのに！」
「だってベア、それ面白……ぷふっ！」
「もう！」
「ごめんごめん……んで、ベアは何を私に相談しにきたのよ？」

「だ、だって……グランがドラフ騎空団でも作るのかもしれないだろ！　そうしたらどうするんだ！」
不意打ちである。今度は、耐えられなかった。
「あっははははははは！　ドラフ！　ドラフ騎空団って何！　ベアそれ本気で言ってるの？　っははははは、はーお腹いたっ！」
「な！　笑い事じゃないだろ!?」
「笑い事も笑い事じゃない。くっくくく……っはははははは！」
「ゼタぁ！」
度を越した感情というのは制御が難しい。怒気や悲哀などには慣れているゼタも、さすがに己の笑いのツボには勝てなかった。
すぐには止まらない笑いを収めるために要した時間は数分。ゼタが全力疾走の後のように乱れた呼吸を戻すころには、ベアトリクスはすっかりへそを曲げていた。「つーん」とか言いながら窓の方を向いて、ゼタと目を合わせようとしない。
そこまで不機嫌でありながら、部屋を後にしたりしないのがまた可愛らしくてゼタは笑いそうになるが、これ以上やると怒りを通り越して泣かれるかもしれないので自重。
「ベア」
「……」
「ベア、ごめんって」
「……」
「笑いすぎた事は謝るわ、おかしかったからつい、ね？」
「……」

「それにしてもドラフ騎空団かー、ユーステスやバザラガが聞いてたらなんて言ったかしらね」
「お前本当に謝る気あるのか!?」
「あ、やっとこっち向いた」
「はっ！」
　ハメられた……となぜか落ち込むベアトリクスをなだめすかして一言。
「まあまあ、そんな気にしなくていいってば。多分、グランはただのおっぱい星人よ？」
　思わぬ情報だったのか、バッと顔を上げるベアトリクスの表情は驚愕一色である。しかしこれは、別にベアトリクスを元気づけるための嘘とかではなく、恐らく事実だ。というのもゼタの実体験からきている。
　グランも団長という立場に責任感を感じているのだろう。女性団員に不躾な視線をやるまいと頑張っているのは分かるのだが、どうしてもたまに視線を感じる時はある。
　そもそも水着を着た時はガン見されている。ガン見である。ガン見という言葉はあのグランにこそ相応しいのだろうと思うほどにはガン見である。あまりにも堂々とした態度に、年下の少年相手に取り乱してしまったことまで思い出したゼタは「オホンっ！」「？」軽く咳払いをして、
「あたしだってグランからそういう視線感じたことあるし」
「そう、なのか？」
「そ。だからあんたの不安は杞憂よ杞憂」
「……」
「それでも不安っていうなら、ちょっと落ち着いて考えてみたら？」
　ゼタは紅茶を一口。
「ベアももう一杯飲む？」
「……飲む」
「砂糖３つね」
「なっ……なしでいい！」

やけくそのように叫ぶベアトリクスに、ゼタは仕方がないものを見るような顔をして、「ったく、本当に負けず嫌いなんだから……」お望みの通りに淹れ直すが、
「うええ……美味しくない……」
「砂糖」
「いいい、いらない！　このままで飲める！」
「どうせ飲むなら美味しく飲みなさいってば」
「ああっ！」
無駄に高度な駆け引きを繰り広げつつ、ベアトリクスの紅茶に砂糖を入れることに成功したゼタは、「よし」と満足げな表情で、自身の紅茶を一口飲む。ゼタを悔しげに見つめるベアトリクスも、合わせて一口。
「……美味しい」
「そ。それはよかった」
ゼタの落ち着いた態度が功を奏したか、それとも気を休めることが出来たのか。大人しくなり、紅茶を飲んではうんうん唸るベアトリクスを、頬杖をついて見つめる。会話はない、静かな時間。静寂がゼタの部屋を包む。
あまり粛々とした雰囲気は好きではないが、今のそれは好きだと言える。緩やかな時間経過はまるで組織に入るよりも昔のことを思い出させて、ゼタは少し笑った。
さて。根っこの部分は子供の頃からまるで成長していないベアトリクスが、どういう結論に至るかを、恐れ半分好奇心半分で待っていると。一度大きく深呼吸をしてから、決意のこもった面差しを向けてくるのに、そう時間はかからなかった。
「どう、心は決まったの？」
軽いジャブ。反応はばっちりだ。ベアトリクスは重く首肯して、それを見てうんうんと頷くゼタ。
「私、グランと話さないと」
「よかったじゃない。やるべき方針が決まっ「ちょっとグランの所に行ってくる！」って、ちょっとベア!?」

言うが早いか、来たとき同様風のような速さで部屋を出ていくベアトリクスを見て、ゼタはやれやれと首を振ってから、様子だけは見に行こうかと席を立つ。

紅茶を飲ませ、なだめすかし、話をした。ここまで落ち着かせたのだ、もうやらかしたりなんて――大丈夫、よね？　あれ、すごい不安になってきた、とゼタは早足になった。

しかし、今回の件は本当に微笑ましい。ベアは本当に乙女なんだから、と口に出さないようにするのが大変だった。

つまるところ、気になっていた異性の趣味が自分から外れていてショックを受けた。ただそれだけの事を、あれだけ騒ぎ立てられるのだから。そんな彼女を愛らしいと思うと同時に、少し羨ましく思う。

「恋、か。してみたいんだけど相手がいないのよねー」

これまでの人生で星晶獣を狩り、騎士団に入り、と色濃い人生を送ってきたゼタではあるが、男性との出会いには恵まれていない。自分の肢体や顔にしか目が行かない論外か、組織の男たちのように悪いとは言わないがピンとは来ないものばかり。

気が合う、という条件ならいい意味でグラン、よろしくない意味でバザラガが挙げられるが、両者ともにもう一声ほしいところである。乙女は安売りするものではないのだから。

って、あたしの話はいいんだってば。ゼタは首を振って歩みを進めた。

たどり着いたのは食堂。団員たちの憩いの場であり、自室の次に心休まるところだ。航行中のグランサイファー。今は指揮をジータがとっていることを考えると、グランは自室にこもるタイプでもないし、ベアトリクスの判断は妥当だろう。

さて、と。周囲を見回すまでもなく、一角にグランとベアトリクスの姿が見える。ゼタは「もう少し人が少ないところで聞くべきだと思うんだけど……ま、いいか」と近場のテーブルへ着こうと――

「――私はドラフじゃないが、その、胸はある方だと思うんだ……だから、お前の所（騎空団）にいても大丈夫か!?」

「!?」

――着こうとしたところでずっこけそうになった。
ベアトリクスの用とは、グランも全く予想だにしていないものだったようだ。しかも息を切らせて頬を上気させての一言である。声量を全く気にせず叫ぶように伝えられたその言葉は、当然周囲にも聞こえるわけで。グランやゼタがそっと振り返ると、
「おいおい……こんな白昼堂々と」とはラカム。
「え、あの……え!?」リーシャは困惑し。
「若いのう」ヨダルラーハは眩しいものを見た、とばかりに目を細める。
「何やってるのよ、そうよそこで腰に手を回すのよ団長さんほら早く！　ああ何慌ててるの女に恥かかせる気!?」耳年増筆頭のコルワは何やら手に汗握ってエキサイトしている。
「グラン……さん……？」サラの目からハイライトが消えているように見えるのは気のせいだろうか。
他にもまだまだいる団員の目が、全てグランとベアトリクスに注がれていた。そこまで認識したところで、「俺何かした？　悪いことでもしちゃったのかな？　あはははは……」
「あのおバカ……」
ゼタは頭を抱えて、本人が気づかないままグランに熱烈な告白を果たしたベアトリクスを今すぐひっぱたきたい衝動と戦う。が、そんなことをしたところでもう遅い。既に何事もない収拾は不可能である。もう燃料は注ぎ込まれてしまったのだ。一度大火が灯ってしまえば、バケツの水程度で鎮火されることはない。
「はぁ……」
これの火消は私の仕事か、とひとりごちる。組織でも、ベアトリクスのフォローは大抵ゼタの仕事だった。危なっかしいでは言い足りないのがベアトリクスなのだ。敵には捕まるわ恥ずかしい秘密を自爆するわそそっかしいわ、今も盛大にやらかしているし。今回については、少しだけ焚き付けた自分にも責任はあるが。
（あ、でも）
ゼタは浮かしかけた腰をまた椅子に下ろす。普段何事にも動じな

いグランの、半分諦めたような泣きそうな顔を見ていたら、ちょっとした嗜虐心がむくむくと。珍しい、という驚きや、可愛らしい、とSっ気が顔をのぞかせたのだ。

にんまりと笑ったゼタは、途端にざわつきだした食堂を楽しげに眺める。フォローに回るのはもう少し後でもいいだろう。だってほら、どんどん面白い方向に転がりつつあるし。

「お前ってただのおっぱい星人なんだよな？　ドラフじゃなくても大丈夫なんだよな!?」

「頼むから黙っててくれベアトリクス！」

「おい団長、その返事はねえだろ」

「けんぞくぅはおっぱいが好きなの？　ヴァンピィちゃんは小さくてごめんね……」

「ちょっと待ちなさい。まさかとは思いますがグラン、あなたヴァンピィにまで手を」

「ギャー！　不潔っすけだものっす！」

「グ、グラン……俺は君を信じてもいいんだろうか……？」

「……うちも団長はんの、好みなんやろか？」

「う、う～～～～!!　ウチだってまだ成長するんだから！」

「……まあ、年頃の殿方ですから多少は大目に見ますが。その不埒な目でお姉さまを見たら殺します」

「なんとも賑やかねえ」

「本当、みんな楽しそうね」

「――本当に、勘弁してくれーーーー！」

結局この騒動は、目的地の島に着いてからもしばらく続いた。疲れ果てたグランの顔にシェロすらも驚いたというのは、まったくの余談である。

トリプル美少女錬金術師（カリオストロ、クラリス）

どうして本拠地の船の中で、こんな思いをする羽目になっているのだろう。乾いた笑いが口をついて出るのを、止めようとは思わなかった。

グランはとある部屋の片隅でドナドナを口ずさんでいた。頬は心なしか痩けていて、さながら様相は真っ白に燃え尽きたボクサーのよう。命の危機に瀕しようとも決して鈍ることのない眼光は色を無くし、どこか虚空を見つめている。撤退スタンプにそっくりだった。

ランスロット達のように普段のグランを知る、信頼する者が見れば目を疑うような光景。それを作り出しているのは、部屋の主たる錬金術の開祖、カリオストロに他ならない。ちょっとばかりヤバい秘密が握られた結果、グランはカリオストロの実験台（おもちゃ）にされることになったのである。

ある意味で最年長の美少女錬金術師はとても上機嫌な様子で、「団長さーん、カリオストロが選ばせてあげるね？　右にー、左にー、真ん中ー。どのお薬をキメちゃうのかなっ☆」様々な毒々しいポーションを掲げた。

「その言い方はやめてくれ……」

何もされていない内から疲れきった様子でグラン。カリオストロの持つ3種類の薬は改めて見ると、どれもが見るからにドギツいピンクや紫色をしている。飲んだらタダでは済まないことは請け合いである。

「ちなみに順番に性転換薬、女体化薬、グランくんがグランちゃんになるお薬だよ☆」

やっぱりタダでは済まなかった！

「どれも一緒じゃないか！」

「ほぉ、よく気が付いたな。察しの通り、実は全部同じ薬だ」

「色が違うのは？」

「着色料のぉー、ち・が・い☆」

「無駄な凝り方！」

同じ薬を三つも、しかも色だけ変えて用意した理由を尋ねれば、こーいうのは雰囲気なんだよ雰囲気、とカリオストロはのたまった。その雰囲気とやらで今まさに女体化を経験させられそうなグランとしてはたまったものではない。

というか、

「なんで性転換……？」

「その方がぁー、面白いかと思って☆」

「ハッハハハハ、全然面白くないんだけど!?」

「オレ様が楽しめればいいんだよ」

「このナチュラル外道男幼女！」

「好きなんだろぉ？　こういう女の子がさぁ～」

「ああ、嫌いじゃないのは認めるさ！　でも自分がなりたくはない！　そんな変態趣味なんて持ってないし！　……あ」

会話の流れに乗せられて、全く言わなくてもいい事を口走ってしまったグランは慌てて口を抑える。が、もう遅い。

「ほぉう？」

温度が感じられない言葉である。カリオストロは先ほどまでのからかい半分美少女モードを脱ぎ捨てて、その鋭い視線でグランを睨め付ける。ごくり、と唾を飲み込んだ。事実、いつも以上にカリオストロは本気だった。

「変態趣味、とのたまいやがったか。お前はもう少し、分かってるやつだと思ってたんだがなぁ？　こりゃ明日にはお前の性癖が船中に知れ渡ってるかもしれないな？　やーん、団長さんったら可哀想☆」

「男に産まれた以上、大きな胸に惹かれるのは仕方がないじゃないか！　エロ本については勘弁してくださいマジで！」

「あんなのただの脂肪だ脂肪、直に揉んだこともないエロガキがおっぱいを語るんじゃねぇよ。ヤダ、面白そうだし」

「ぐ……中身なんて関係ない、おっぱいはそれだけで魅力なんだ！　カリオストロだって知ってるだろう！　そこをなんとか！」

「慎ましさ」

「巨乳！」

「……譲らねぇな？」
「……譲れないさ」
　キリっとした表情で実におバカな論争を繰り広げる二人は、もちろん両者ともに大真面目。睨み合いの末、カリオストロはフッ、と笑みを零した。
「なるほどな、平行線ってわけだ。やっぱりお前には一度、体験（ようじょになって）してもらうしかねぇか……！」
「誰が！　阻止してみせるさ！」
「オレ様相手によく吠えた！　だが、甘いぞグラン……ウロボロス！」
「っ、しまった!?」
　カリオストロの指示があるや否や、背後から猛烈なスピードでグランの体を這うウロボロス。カリオストロ本人とその薬を警戒するあまり、ウロボロスの存在を失念していたグランは、呆気なく自由を奪われて締め上げられる。
「壁に耳あり障子に目あり、床にウロボロスありってね☆」
「語呂悪くない!?」
「気にするな、錬金術師流の諺さ。さて……それじゃあ団長さんっ、お楽しみの時間だよ☆」
「ちょっと待ってくれカリオストロ！　他の頼みなら優先的に聞く！　聞くから！　だからその薬はちょっとほんとにやめてくれあのちょっ……アーーーーーーーッ！」
　野太い悲鳴が、部屋に木霊した。ただしカリオストロの部屋は防音壁なので誰も気づかないし助けにも来ない。現実は非情である。

☆

「ほぉれグラン、どうだ？　美少女ボディの心地は？」
「……スースーするんだけど」
「スカートなんてそんなもんだ、いずれ慣れる」
「……ズボンは？」
「ねぇよ。オレ様のパンティならあるが？」

「履かないよ!?」
嗜虐心１００％の笑顔で下着をヒラヒラとグランの目の前で振るカリオストロに、グランはたじたじである。勘弁してほしい。たとえ現状女の子同士だからといって、中身は男のままなのだから！　……なんか考えてて死にたくなってきたグランだった。
天才が作ったポーションの効き目はさすがというか、グランは見事に幼女化していた。身長はカリオストロとどっこいのちっこさで、癖っ毛を少し伸ばしたグランが縮んだような印象。中性的でありながら線は丸みを帯びていて、まさに美少女である。
しかも哀れ、着替えまでさせられているときた。体のサイズが違うので、自分の服が着られなくなったからだ。裸でいるわけにもいかず、匠カリオストロの手によって、全身ロリロリファッションに身を包んでいるのである。多分鏡見たら泣くと思う。
とても大事なものを失ったような気分のグランだった。
「次は何を着せよっかな～☆」と非常に愉しげなカリオストロと対称的に、気分はどんどん滅入っていく。
というか何そのフリフリいっぱいのアイドル衣装みたいな服。そういうのは巫女さんとかに渡したらいいと思うんだけど。
「はぁ……効能はこれで確認できただろ？　もうやめにしようよ、カリオストロ」
「あ？　何言ってやがる、まだ一時間も経ってねぇんだぞ」
「俺は一生分の女装を味わったよ……」
着せられた服のフリフリの袖を腐った魚のような目で眺めながら、グランは嘆願する。
「明日だって依頼があるんだ。そろそろ備えて寝たいし、元に戻してほしいんだけど」
「え？　カリオストロ、そんなの用意してないよ？☆」
「……え？」
それはある意味、最もこの状況で聞きたくなかった言葉かもしれない。
女体化後、グランは初めて顔を上げて視線をカリオストロと合わせ

た。鬼畜錬金術師の方は「悪くないな……もちろんオレ様ほどじゃないが、中々の美少女だ」などとうんうん頷いている。その発言も改めてダメージなのだが、重要なのはそこではない。
「ん？　どうした？」
「いやちょ、待……え!?」
「だってぇ、今朝できたばかりのお薬だしぃ☆」
「はははは、カリオストロは冗談が上手いなぁ」
「えへっ☆」
「……」
「んー？☆」
「……マジ？」
「うん、大マジ」
「……ええー……」
　ついにグランの目からハイライトが消えた。ポム、とカリオストロは肩に手を置く。
「どんだけ長く見積もっても、半年もあれば元に戻るさ。安心しろ」
「ウソでしょお!?」
「なぁグラン。オレ様と美少女ライフ、楽しもうぜ？」
「カケラも惹かれない誘い文句ありがとう、遠慮します！　……遠慮できるよね!?」
　えっこれどうすんのマジで。戻れるよね、戻れるって信じてもいいよね。じゃないと、今まで団長として頑張ってコツコツと積み上げてきた信頼とか威厳とかその辺どうすんの？　……いやまあ、尊厳の方に関しては最近元々揺らいでたところはあるけどさあ!?
　この姿で？　先陣切って戦ったり騎空団運用したり依頼人と交渉したりするの？　ウソウソそんなの嘘に決まってるこれは夢そう悪い夢なんだヴェトルの悪戯なんだよそうだよなジータハハハええ……。
　そして床に突っ伏したまま動かなくなる。グランも色々と限界である。もう何も考えたくない。
　さすがにここまでの壊れっぷりを見ると、最初は爆笑していたカリ

オストロもさすがに罪悪感が芽生えるわけで「グラーン？」と声をかける。もちろん返事はない。
「……」
伊達に千年生きていないカリオストロ、グランの心が真面目に折れかけている（というか折れてね、これ？）ことには当然気づく。つんつん突ついても、ウロボロスにはむはむさせても、スカートを捲りあげても、グランは死んだように動かない。重症のようだった。
ここにきて、カリオストロはようやく己の悪辣さに気が付いた。というか気づいてて無視してたけど認めることにした。だってこんなグラン、詰まらないではないか。
それに、趣味は個々人のもの。押し付けるものではないのだ。今回はいささか悪乗りが過ぎたか、と心の中でだけ呟いて反省する。
一つ大きくため息をつく。
「……しょうがねぇ、解毒薬、作ってみるか」
「カリオストロ！」
復活。そしてひしっと抱き着くグランに「お、おい!?」と一瞬慌てるものの。グランが男状態じゃないのも相まって、カリオストロはすぐに落ち着いた。ちなみにグラン、解毒薬というワードは聞かなかったことにした。精神安静のために致し方ない措置だ。
カリオストロはポンポン背中を叩いてグランを落ち着かせてから、頬をポリポリと掻いて、「はぁ、今回はオレ様が悪かったよ。だから何とかするのを手伝ってはやるさ」とぶっきらぼうに言い放つ。
「うんうん……うん？」
涙ながらにカリオストロの事を見直していたグランは、とある一言に引っかかりを覚える。いま、「手伝ってやる」とかおっしゃいませんでした？　戻してくれるんじゃなくて？
「えっと……カリオストロ？」
「聞き間違いじゃねえぞ？」
床に積まれた本の山の向こう側から、カリオストロはぽかんとした表情のグランに白衣と保護メガネを投げつけた。ぱちくりとそれを見つめるグランに、「何してる、さっさとアルケミストになれ」と、試

験管やらを準備しながら注意する。
「もしかして……」
「せっかく将来有望なやつが、錬金術の深域の一端に触れるんだ。ただオレ様が治してやるってのも芸がないだろ？　そう思うよなぁ？」
振り向いたカリオストロは、とてもイイ笑顔だった。ぶっちゃけ今は男に戻れれば何でもいいのだが、バカ正直にそう言ってカリオストロがへそを曲げても困る。グランは勢いよく何度も頷いた。
「でしょう？　だから、今日は特別講義をしようと思うの☆
団長さんには是非、錬金術の何たるかを……いや、待てよ」
カリオストロは人差し指を唇に触れさせ、一瞬考え込んでから、「もう一人受講者を増やす。いまから連れてくるから、その辺からペンや羊皮紙でも漁って待っとけ」と言って出て行ってしまう。
声をかける間もなく、一人部屋に取り残される形となったが。
当然、グランに逆らう選択肢はなかった。

☆

「という事で、グランちゃんになった団長さんだよ☆」
「いやどういう事態!?　クラリスちゃんさっぱり分かんないんだけど!?」
錬金術の受講生として。まあ予想通りというか、カリオストロが呼んだのは、同じく錬金術師で子孫のクラリスだった。
いきなり引っ張られてきたクラリスはとても困惑していた。突然、師匠に部屋に呼ばれたと思えば、女体化した上にちんまいグランとご対面。クラリスの心境は、まさに「ちょっと待ってほんと意味分かんない」に尽きた。そりゃそうである。適応できる方がおかしい。
（というか小さい、可愛い、肌とかすっごいキメ細やかだしもち肌なのかな、えっ何それずるくない？）
案外順応していた。どうなってんだこの一族。
ハッと我に帰る。ついつい女子目線でグランを見ていたクラリスだったが。それどころじゃない、と首を横に振ってから、「それで？

ウチはなんで呼ばれたの？」グランの隣に腰掛けて尋ねた。
「錬金術の特別実習さ。今回の課題は女体化現象の鎮静化をテーマとする。被験者はグラン。監督役はオレ様。お前ら二人は生徒ってワケだ」
「ふーん、治しちゃうんだ。結構可愛いのに、ちょっともったいない気もするなー」
「……」
「あ、あれ？　グラン!?　なんで泣いてるの!?　えっ嘘ごめんってば！」
「ああ、今グランかなり繊細だから扱いには気をつけろよ」
「その情報もっと早く言ってよーー!?」
　さめざめと涙を流すグランに大慌てのクラリスは、「ほ、ほら！　今のグランも好きだけど、いつものグランの方が、うち好きだよ？　かっこいいし、頼りがいあるし！　だからね？　ね？　泣かないでってばーっ！」と盛大に自爆していた。
「お前、中々大胆なこと言ってるが自覚あるか？」
「はぅあ!?　あ、えっと……違くて、でも違ってなくて……あの、その……あーーもーーっ！　分かった！　最カワ錬金術師のクラリスちゃんも何とかするの手伝うから、それでいいでしょ!?　はい、以上！　この話は終わり！」
　顔を真っ赤にしてぷんぷん怒らせるクラリスに、カリオストロは呆れたような視線を向ける。
「当たり前だ。弟子は師匠に絶対服従、前も言っただろ。これも錬金術の一つの結果だ、大人しく勉強するんだな」
「わかってるっ」
　クラリスはすーはーすーはーと深呼吸を繰り返して、なんとか意識を切り替えようとする。そして「よし！」の一言とともに、いつもの自信満々な顔を見せられる程度に持ち直したようだった。
　実際はまだ顔赤いけど、そこに触れると話が進まないことぐらい誰もが分かっているのでスルーである。
「さて」

カリオストロは主題を切り出す。
「まずは情報共有だ。オレ様が開発した「ドキッ！　気になるあの人を性転換☆」ポーションを飲んだグランが幼女化した。以上だ。他に聞きたいことがあるならここではっきりさせておけ」
「うん、これでもかってくらいぶっ飛んでるけどそれはもういいや……ねえねえ質問ー。ししょー、それって何かがグランに影響を及ぼしてるって事でしょ？　うちがグランにドッカーン！　したらダメなの？」
「失敗したときグランの体が吹き飛んでもいいならオレ様は構わないぜ？」
「……」
「そ、そんな顔しなくてもやらないってば！　冗談だよ冗談、錬金術師ジョーク！」
錬金術師が信用できなくなりつつあるグランだった。
「ククク、英断だ。元々クリアもディスペルも効かないように設計してあるからな」
「うっわー、無駄のない無駄に洗練された無駄な技術」
「叡智ってのは、その無駄から生まれたりするもんさ……さて、無駄話は終わったな？　じゃあまずは、「ドキッ！　気になるあの人を性転換☆」の原理について話していくぞ」
もはやツッコミを入れる気力もない。カリオストロはそんな二人に背を向けて、黒板にチョークを走らせる。
「いいか？　錬金術は高度だが、学問であって魔法じゃねぇ。バカじゃなければ誰にでも門戸を開く技術だ。それを頭に入れてから聞け。まず、女性と男性の体の違いは――」

☆

「へー、それが原因だったんだ」
「ああ、いまグランのY染色体は特殊なX染色体に変化している。それが女体化現象の大元の原因だ。……じゃあ問題っ、どうやったら団

長さんは元に戻るでしょう？☆」
「はーい！」
「はい、クラリスちゃん、どうぞ☆」
「えーっとね、YがXになっちゃってるのが悪いなら、XをYにする薬を作るのってどう!?　これで決まりーみたいなっ☆」
「そしたら全部がYになるじゃねぇか。ＹＹ染色体の人間なんていねぇよ、お前はグランを何にするつもりだ……？」
　ぶーっ。クラリスは論破されて撃沈する。グランも「じゃあ」と手を挙げた。
「ん、グランか。いいぞ」
「Yを保護する薬を作るとか」
「うーん、残念賞☆
　発想は悪くねぇが、変性したYを今さら覆って守ったところでそれがXに戻るわけじゃねぇからな」
「なるほど」
　実に理論的な話だった。すかさずメモを取る生徒二人。メンバーがメンバーだ、最初こそハラハラドキドキの心証だったが、グランも意外に思うくらい講義は着々と進んでいた。
「うーん、難しいよぉー！　いっそその染色体？　ってやつ全部入れ替えちゃうとかどう？」
「元に戻りたいって言ってるのに中身とっかえてどうすんだ、アホ弟子。……お前、実はグランが嫌いなのか？」
「え……」
「そそそそんなわけないし！　だからグランも真に受けるのやめてってば！」
　……着々と、進んでいた。

☆

「じゃあこんなのはどう？」
「それだと結局――」

「リィンフォースじゃ治らないの？」
「クリアは無効にするって言っただろ」
「……やっぱりドカーンとやっちゃわない？　ほらうち、ししょーの時はバッチリ成功したしさ、今回もきっと大丈夫だって！」
「……」
「なんで目逸らすの!?」
「それが信用ってやつだ」
「そ、そんな……グランは、うちのこと信じてくれてるよね？　ねっ？」
「……ごめん」
「グランーーっ!?」
　ああでもない、こうでもない。四苦八苦するクラリスとグランに、適宜アドバイスを送る形のカリオストロ。
　長い夜になった。そして――

☆

「……ん」
　眩しい。窓から差し込む日の光に、むくりと起き上がるグラン。眼をしょぼしょぼとさせながら大きく一伸びする。そして、ミチィ！とヤバめの音がしたので即座に固まった。徐々に眠気が覚めてくるうちに気づく。
　――目線が、高い。手足も窮屈なことを除けば違和感がなくなっている。こ、これは……！
「も、戻ったのか……？　戻れたのか！　やったあああああ！」
　ヒヒイロカネが手に入った時でもここまでは喜ばないほど、グランは心の底から歓喜の声を上げた。やっぱり男に生まれた以上、男でいることが一番心の平穏にいいのだ。そもそも大半の人間は一生性転換することなど無いのだが、とにかくグランは戻れたことが純粋に嬉しかった。
「……うっせーぞぐらん……」

「むにゃむにゃ……やっぱりクラリスちゃんがさいかわだよね、グラン……」
「！」
　両隣にはクラリスとカリオストロが寝ていた。しかも全員で一枚のタオルケットを共有している始末である。どうやらカリオストロの部屋の中で夜を明かしてしまったらしい。
「そうか……二人とも、付き合ってくれてたんだよな……」
　二人の寝顔を見て、グランは心の中が暖かくなった。
　眠気との戦いでもあった、詳しく覚えているわけではない。それでも二人が真剣に、親身に自分のために知恵を絞り、時間を割いてくれていたことは間違いない。いやまあそのうち片方は元凶も元凶なんすけどね、と少し遠い目にもなりかけたものの。胸に抱いた感謝の気持ちは、本物だったからだ。
　本当にいい仲間に恵まれた、そう実感するグランだった。
「にしても、さすがにこの格好は勘弁だ。……生地とか伸びきってるけど、破ったりしない方がいいよな？」
　ぱっつんぱっつんになってしまったフリフリロリータファッションの服をどうにか脱げないかと四苦八苦するグランは、何とかスカートを下ろすことには成功した。問題は上半身だが、どれだけ身をよじらせても隙間の一つも作れそうにない。これ切断せずに脱ぐの無理じゃね？　と途方に暮れ始める。
　そんな時だった。
「……これ、どういう、状況……？」
　声がする。それも、扉の方から。ギギギ、とグランが油の切れた機械のようにぎこちなく振り返ると、顔面を蒼白にさせたジータが、グランをハイライトの消えた目で見つめていた。その目は冷たいようでいて、それ以上に自分こそが冷水をぶっかけられたような、見ていて酷く心がざわつくものだった。
　さて、客観的にグランの状況を分析すると、『着れもしない女児の服を無理やり身に着けて、美少女２人と同じ部屋で夜を明かしたと思われる半裸の男』だ。字面だけでも完全にアウトである。絵面はもっと

酷い。
　並大抵の件ならともかく、これを誤解だと思える懐の深い人間などそういるはずもない。少なくともジータには十年来の信頼よりも現状のヤバさが勝っていた。
　ジータの顔に浮かんだ感情を、グランは正確に把握する。そしてそれが、結構マジで根深そうだという事にも一目で気づいた、気づいてしまった。
「違うんだジータ」
「何が違うのか、よく分かんないんだけど」
　ジータは一歩下がる。グランは一歩詰める。
「とにかく違うんだジータ！」
「わかった、わかったからさ……特殊なプレイは、ＴＰＯを弁えてからしてよね」
　今度は二歩下がる。グランもまた詰める。
「待ってくれジータァ！」
「うるさい寄るな変態！」
　最後は踏込だった。追いすがろうとしたグランの鳩尾を的確に射抜く強烈な右ストレートである。精神的ダメージで背水かかってるので気持ち威力高いかもしれない。グランは一発Ｋ．Ｏ．された。
　倒れ伏すヤバい恰好のグラン。目を背けるジータ。深い眠りにつく二人の美少女錬金術師。とてもカオスな状況である。
「じ、ジー、タ……」
　グランは震える声を振り絞りながらジータへ手を伸ばすが、
「ごめん。ごめんね、グラン。でもね……グランのそういう姿、すぐには受け入れられそうにないから……少しでいいの、時間をちょうだい」
　バタン、と。言うが早いか扉を勢いよく閉めたジータには届くことはなかった。
「いや、だから……受け入れなくて、いいから……」
　だってマジで誤解だもの。その一言を告げることすら出来ずに、グランはカリオストロの部屋で床に沈むのだった。ちーん。

☆

ジータは脇目も振らずに廊下を疾駆した。目的地は自分の部屋である。そのままベッドの中に飛び込んで、何も考えずに布団に包まっていたい。いまは誰にも会いたくない気分だった。

信じたくはなかった。兄妹同然に育ってきた大切な人が、その……口に出すのも憚られる趣味をしていたなんて！　しかし、さっきの光景が現実なのだ。グランはきっと、カリオストロたちと夜な夜なピーで自主規制なドッカーンをしていたに違いない。だってそれ以外にどんな事情があればあんな姿になれるのか。

一緒にいた期間なら、私の方が長いのに。なんで、どうして？　そんな言葉だけが、ジータの心を埋め尽くした。そんな中、思い起こすのは幼少時代から旅立ちに至るまでの、グランとの思い出である。

ビィとグランと三人（二人と一匹？）で誕生日パーティをした。川に入ってお互いびしょ濡れになった。雷が鳴る夜、一緒のベッドで寝た。そんな懐かしく暖かな思い出が、頭の中を泡のように浮かんでは消えていく。

他人の性癖を悪く言うつもりはないが、さすがに程度があるというか、シャレになってないというか、誰よりも近しいと思っていた人の変貌はジータにそれだけのショックを与えていた。

そして、一つ大きく決意する。

グランがそんな道を選んで秩序絶対守るウーマンにトワイライトソードされるぐらいだったら、私は――

☆

「おっ、よう副団長！　どうした、今日は元気――」

「……っ！」

「だな、……って」

朗らかに手を挙げながら挨拶を試みたフェザーだが、ジータはそれ

に答えることなく走り去ってしまう。速度を一切緩めることなく疾駆するジータはすぐにフェザーの視界から消えていなくなり、彼はそれを見送ってから困惑した。
明朗快活才色兼備のジータが、挨拶を無視するなど尋常な事態ではない。それに何より、その目にはきらりと光る雫があったように見えた。
一体何があったのだろう、と拳を組みながら頭をひねる。フェザーは知っているのだ、拳はすごい、拳で考えればどんな難題でも解決する。拳に間違いはない。拳は最強なのだ。
そしてなぜか、考えが至った。あの副団長が良くも悪くも心を砕いている拳の持ち主といえば、フェザーも認める拳をした彼の団長に違いない。恐らくだが、団長と手合わせをして完膚なきまでにやられたのではないだろうか。
おお、意外といいセン行ってるんじゃないか!? オレも痛い目にあったしな、気持ちは分かるぜ! と全く見当はずれな納得をしたフェザーは、「こういう時こそオレがなんとかしなきゃな!」とテンション高らかに拳を握る。
なにせ稽古や鍛錬こそが実力の不振を払ういい原動力なのだ、伸び悩んでいるだろう副団長を助けなくて何が団員か! それに、壁とぶつかった経験は決してジータに劣るものではないと自負しているフェザーである。アドバイスの一つや二つ出来るだろうと思ってのことだった。
「副団長の事はオレがなんとかしてみせる!」
そう息巻いて、彼は自室へ戻って行った。

――そして。
「……何よ何よ、なんなのよこの状況はーーっ!」
そんな状況を偶然見かけたハッピーエンド好きの作家がいたりして。蒼空を駆けるはずのグランサイファーは、暗雲立ち込める混沌の未来へと飛空する――っ!

「いやいやいや、うちにもししょーにもグランにもそんな趣味とかないからっ!?」
「オレ様でももっと普通の性癖してるっつーの」
「えっ」
　そんなこともなく、当人同士の問題は顔真っ赤にしたクラリスとめんどくさそうなカリオストロの弁で解決した。必死に謝ってくるジータをなだめつつ、ほっと胸を撫で下ろしたグランだった。